

第 19 話 外国船の来航と海防

折から、我が沿海には、北からも南からも頻りに外国船が来て通商を求める。
鎖国の方針を厳守して変えない幕府は、専ら海防の策を講じて、外国船を撃払おうとする。徳川齊昭の尊王攘夷論。

内には尊王論が漸く盛んになって、武家政治の不当について国民が目覚め始めた時に、外には外国船の渡来という思いもよらない刺激が次第に強く加わった。こうして国内の形勢は俄かにあわただしく変化し始めて、いよいよ江戸幕府の衰亡時代へと向って行った。いわゆる幕末の世がこれです。

世界の形勢

さきに、三代将軍家光が寛永 16 年（西暦 1639 年）の 7 月に国を鎖して以来、我が国民は国内の小天地に泰平の夢を貪っていたのですが、爾来 150 余年の間に世界の形勢は全く一変してしまいました。鎖国の当時に盛んでしたポルトガルやイスパニアは既に衰えて、イギリスのみが独り勢いが盛んで、着々とインドを計略し、オランダを圧して、東方貿易の利を一手に収めようと、既に中国と交易を開いて、南方からわが国に迫ろうとしていた。

又、ロシアは、はやくから東方に領地を広めることにつとめて、忽ちシベリアの地を占領して、將軍綱吉の頃には、更にカムチャッカ半島を収め、ついに我が千島列島を侵して、北辺から我に迫って来た。更にまた太平洋のかなたには、アメリカ合衆国が新たに北アメリカに独立して、その振興の勢いをもって東洋に迫って来ようとしていた。

ところが、外国との交通を殆ど全く絶たれたわが国民は、もとよりこういう海外の事情を知りよう筈が無かったので、上下共に依然として泰平の夢を貪り続けていた。この時、逸早く内外の形勢を察して、敢然として起って海防の急務を叫んだのが、即ち寛政の 3 奇人の一人である林子平です。

林子平

子平は、名を友直といい、仙台の人です。若い時から学問および武芸に励み、殊に地図を見るのが好きで、終日食事をさえ忘れるほ



林子平

どだったといひます。足の達者なのにまかせて、北は北海道のはてから西は長崎に至るまで、全国をめぐって、各地の地理、風俗、政治のよし悪しなどを調べた。殊に長崎には 3 度も行って、オランダ人から外国の形勢を聞き知り、海防のゆるがせに出来ないことを悟って、『三国通覧』および『海国兵談』を著した。

『三国通覧』は、朝鮮、琉球、蝦夷の地理を明らかにして、殊に蝦夷地の観察を記して、ロシア

人の南下に対する警戒を促したもので、『海国兵談』は世界の体勢を論じて、いかに我が国が外寇を蒙り易いかを述べ、従って、海防をゆるがせにはしないと説いたものです。

子平の海防論

「わが国は四面みな海で、江戸日本橋からヨーロッパ州に至る間は、一続きの水路であるので、今日、すでに頗る航海術に長じて、砲術に巧みな外国人が、攻めて来ようと思えば、どこにでもすぐに来ることができるのである。これに対して備えをしないのは危うい」と子平は言って、其の海防に就いての抱負を、すべて 16 巻にわたって巨細に披瀝したのです。

ところが、海外の事情に疎く、世界の形勢などは全く知らない当時の人々に取っては、まるで夢のような話ですから、多くの者は、これを以って根も葉も無い空論と考えました。幕府もまた子平の論をもって、いたづらに世間を騒がし、人心を惑わすものと見做したので、その書物および版木を取り上げ、子平を罪して、仙台の兄の嘉膳の家に蟄居させることにした。実に寛政 4 年（西暦 1792 年）の 5 月の事でした。

六無齋

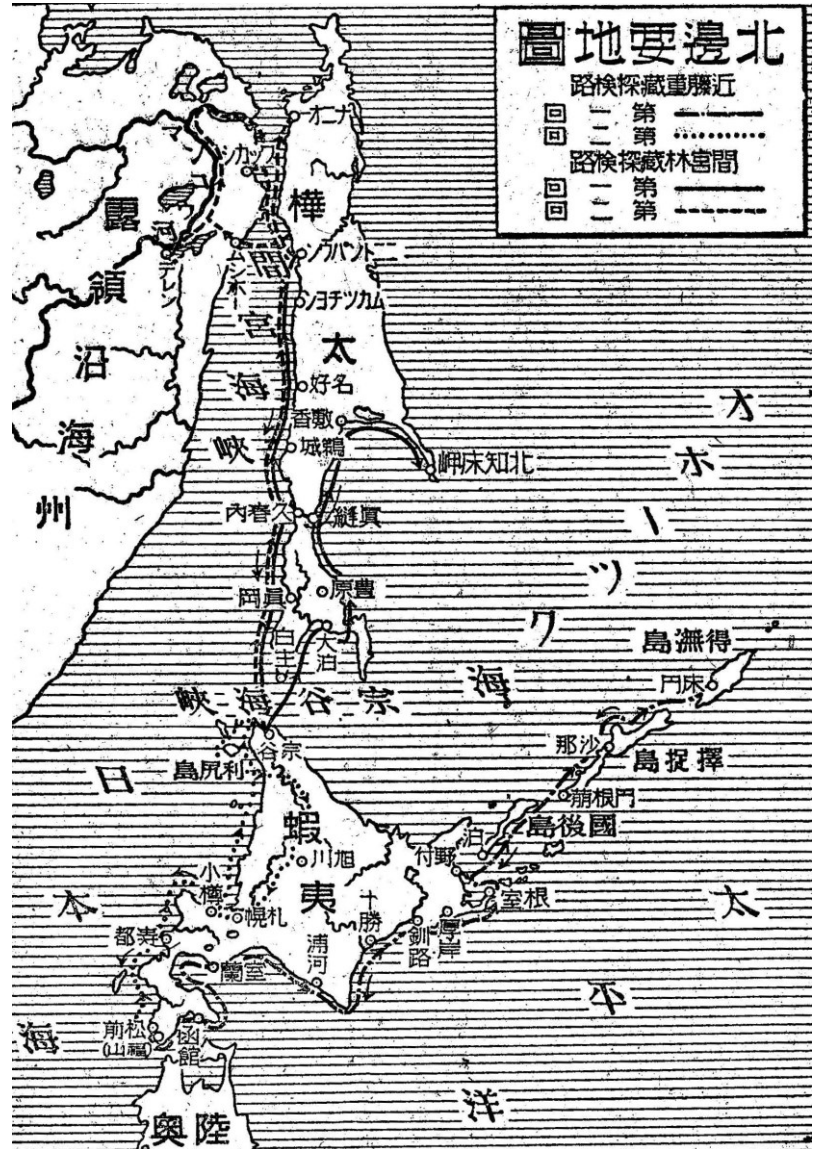
こうして後、子平は兄の家の一室内に謹慎して、一步も外に出ずにいたが、ついに病に罹って、翌 5 年 6 月 21 日に 56 才をもって没した。3 奇人の一人の高山彦九郎が、久留米の森嘉膳の家で自殺するより 6 日前のことでした。

遺骸は仙台の伊勢堂下の龍雲院に葬ったが、その墓を建てることを許されたのは、没後 48 年で、天保 12 年に至って初めてその罪を赦された後でした。その墓には、「六無齋友直之墓」と彫ってあります。これは病中に、

親も無く妻無く子無く版木無し 金も無けれど死にたくも無し

と詠じて、これより六無齋と号したからです。なお、朝廷は、明治の代になって、子平の志を追賞して正五位を贈られ、更に大正の代に正四位を贈られた。

さて、幕府は子平を罪にして、その海防策をしりぞけたが、事実は却って彼の先見の違わないことを



しょうめい
証明しました。

ロシア艦が根室に来る

彼が罪せられて間もなく、僅かに4ヶ月後の寛政4年9月3日に、ロシアの使のラックスマンが軍艦に乗って、北海道の根室に入港して、我が漂流民を還すと共に、通商を開かんことを請うたのです。

幕府はこれを許さなかったが、これより俄かに海防の必要を悟って、時の老中松平定信は、自ら伊豆、相模などの海岸を巡視した。しかし、すでに「松平定信の執政」の話にも少し述べておいたように、この時は彼が間もなく老中を罷めさせられたので、海防策も大しては立てられもしなかった。

ところが、ロシア人はその後も頻りに蝦夷地付近に出没して、千島を侵し、あるいは樺太に上陸したりしたので、幕府もついにはこれを棄てておけなくなって、寛政10年4月、近藤重蔵らに命じて蝦夷地を探検させました。

近藤重蔵の探検

重蔵は名を守重といい、江戸の人です。この時、28才でした。しかし、命を受けて北海道に渡ると、先づ日高方面を視察してから、国後島を経て、同年8月、択捉島に着いた。ところが、そこにはロシア人が建てた露領のしるしの十字架があったので、重蔵は直ちにこれを抜いて、代わりに「大日本恵登呂府」と書いた標柱を建てた。

これを探検の第1回として、彼はその後もたびたび択捉島に渡り、或いは船に積み込んで行った多量の米、塩などを島民に分け与え、或いは新たに漁場を開いて、漁法を教えなどして土民をなづけ、択捉島開拓の基礎をおいた。但し、これには、そのころ蝦夷の近海を盛んに廻航していた淡路の廻漕業者の高田屋嘉兵衛の力もまた与って多かった。

このころ、幕府はまた伊能忠敬の請いを許して、蝦夷地の沿海の測量、製図をさせた。

伊能忠敬

忠敬はもと、神保氏で、上総の山武郡小関村（千葉県九十九里町）で生まれ、武射郡小堤村（現山武郡横芝光町）で育ち、18才の時に下総国佐原の伊能氏を継いだ。頗る拮据勉強して、その頃、甚だしく衰えていた伊能氏の家運を挽回して、天明の飢饉の時には大いに貧民を救ったりした。

寛政4年、50才の時に、家を子に譲って、江戸に出で、幕府の暦官高橋東岡に就いて天文、暦学を修め、又、極めて測量の術に通じた。

蝦夷地の沿海の測量

折から、北海にしばしばロシア人が出没して、幕府はこれに対して警備の道を講じていたにも拘わらず、その基礎となるべき正確な日本地図が、わが国には未だ出来ていなかったのです。そこで忠敬は、寛政9年に幕府に上書して、私費をもってその地の沿海を測量することを請い、同12年になって漸

くこれを許されたのです。この時、彼は56才でしたが、許しを受けると直ちに着手し、その年の12月には、早くも渡島の松前から根室の西別に至る東蝦夷地の海岸の実測図をつくって幕府に献上した。

大日本沿海輿地図の完成

これより忠敬は、関東、東海、陸奥の沿海から出羽、三越、佐渡、能登の沿海へというように、次第に広くその測量を全国に及ぼして行って、文化13年に至るまで前後すべて17カ年を費やして、精密な調査を遂げ、それより整理に移って、5年後の文政4年に、ついに大日本沿海輿地図を完成した。その年、彼は77才で没した。



伊能忠敬

この地図の正確なことは、実に驚くばかりでして、近年に至るまで本邦地図の基本となったのでも聞こえています。そのころの不完全な器械で、よくこの精密な、正確な調査を仕遂げた功は実に大きい。そうして朝廷は、明治16年2月、忠敬に

正四位を贈ってその功を追賞され、又、東京地学協会は明治22年4月に、その遺功を表彰するため、東京港区芝公園の丸山の上に、「贈正四位伊能忠敬先生測地遺功表」と鑄付けた測地遺功表を建てた。

さて幕府は、寛政11年3月、近藤重蔵らの復命を聞いて、これまで松前氏に統治を一任していた蝦夷地の中から、先づ東蝦夷地を収めて幕府の直轄地とし、更に3年後の享和2年には函館奉行を置いて、その地方を治めさせると共に、南部、津軽の両家に命じて、兵を出して北面の警備に当たさせた。

ロシアの使節が来る

一方ロシアは、寛政4年に来たラックスマンが、その翌5年に要領を得ずして帰国してから後は、ただその国人が、千島や樺太に来ての暴行はしばしばあったが、正式には何らの要求もなく約10年間ほどが過ぎた。ところが、11年目の文化元年（西暦1804年）7月に使節レザノフが我が漂流民4人を連れて長崎に来て、再び通商和親の約を結ぶことを請うた。

幕府はその知らせを受けると、急に目付遠山金四郎景晉を長崎に遣わし、長崎奉行肥田豊後守頼常と共にレザノフに会見した。中国とオランダとの外は通商をしないのがわが国の法であるからと、絶対にその要求を拒んで、ただ護送して来た我が漂流民だけは感謝して受け取った。

レザノフは大いに失望し、且つ怒って、翌文化2年3月に長崎を出帆して樺太に向ったが、これよりロシア人の樺太および択捉島に来寇することが、ますます甚だしくなると、我が漁業の番屋を焼き、番人を捕らえて、米穀、貨物などを奪い去るといような暴状をしばしば逞しくしたのです。

それで幕府は、文化4年3月、ついに西蝦夷地をも収めて、蝦夷地全部を幕府の直轄地として、函館奉行を松前奉行と改め、更に仙台、会津、秋田、庄内などの諸藩に命じて、兵を蝦夷地に派して、いよいよ

第 19 話 外国船の来航と海防

よその守備を厳しくさせた。

間宮林蔵が幕府の命を受けて、北方深く不毛の地に進んで樺太島を探検したのもこの頃の事です。

間宮林蔵の探検

林蔵は、名は倫宗、常陸の人です。幼少の時から鋭敏で、殊に数理に長じ、神童の称があったと言われる。文化 5 年 3 月、樺太探検の命を受けた時には、29 才で、宗谷で測量に従事していたのでした。

彼は命を受けると、すぐに準備を整え、樺太の南端に近い自主に渡って、それより東海岸に出て、それに沿って遠く北知床岬まで進んだ。

しかし潮流が急で、そこから先には進めなかったので引き返して、真縫から島を横断して久春内に出で、今度は西海岸を北上して、ラッカという、はるかに黒竜江の河口を望める地点まで進み、樺太が離島であることを見極めた上で、引き返して、閏 6 月 20 日に宗谷に帰着いた。

間宮海峡の発見

ところが、すぐまた彼は再度の樺太探検を命ぜられたので、翌 7 月 13 日に宗谷を發して自主に渡り、西海岸に沿って北上したが、折から、寒さに向かって、氷雪のために前進を阻まれた。止むなく北樺太の地にその冬を過ごして、翌文化 6 年の夏に、更に海峡を横断してシベリアに渡り、黒竜江岸に至って、地勢、風俗などを視察した上、同江を下り、もとの西海岸を南航して、ついに 9 月 28 日をもって宗谷に帰着いた。

実に間宮林蔵は、わが国のシベリアの地を探検した最初の人として、又、これまで大陸の地つづきであると信じられていた樺太が、離島であることを初めて明らかにした人です。それで、彼の発見した海峡は、今日、間宮海峡と呼ばれて、その名に彼の功績をとどめている。

なお、明治の朝廷は、その功を追賞して、林蔵に正五位を贈った。

イギリス船の長崎入港

さて、幕府が、このように、北辺の警備に全力を尽くしている時、文化 5 年 8 月、即ち林蔵が第 2 回の探検に出かけた翌月の 15 日に、イギリスの軍艦が 1 隻、突然長崎に入港した。初めは偽ってオランダの国旗を掲げていたので、長崎奉行松平康英が慣例によって検使を出したところ、俄かにイギリスの国旗にかえて、検使の小舟を追い返し、剩さえその夜、3 艘の小船をおろして港内を勝手に乗りまわした。



間宮林蔵

第19話 外国船の来航と海防

やすひで ぶれい いか へいりよく うった げきたい おり しゅび
康英は大いにその無礼を怒り、兵力に訴えてもこれを撃退しようとしたが、折から、長崎の守備
に当たっていた佐賀藩の守兵は、その大部分が帰藩した後で、僅かの兵しか残っていなかったの
で佐賀藩および大村、福岡の諸藩に出兵を求めている間に、イギリス艦は更に薪水(たきぎと水)と食料
などを強請して、その供給を受けると、17日に出帆して長崎を去った。

やすひで てんまつ きゅうほう こくい けが しやざい
そこで、康英は、事の顛末を江戸に急報すると共に、「国威を汚し、何とも申し訳なく」という謝罪
の書面を幕府に呈して、其の夜、切腹しました。

攘夷論が起こる

しかし、一体、どうしてイギリス船がかかる狼藉を働いたのかというに、その頃、ヨーロッパのほう
では、フランスにナポレオン1世が崛起して、しきりに近隣の諸国を併せて、オランダをもその属領と
したために、フランスと交戦中のイギリスは、オランダ船、即ち敵方の商船が長崎に停泊していると聞
いて、これを捕獲しようとして入港したのです。

ところが、実際にはいなかったの
で、薪水食料の供給を受けると立ち去ったのです。しかし、眼前の
長崎港内における此の狼藉は、遠い樺太、択捉島におけるロシア人の暴行に対してさえ既に大いに憤慨し
ていた国民の心を更にいっそう刺激せずにはおこななかった。わが国民の外国人を憎む心は、ますます強
く烈しくなって、「外国人を撃ち払え」という攘夷の聲は日に日に高まるばかりでした。

ところで、一方、ロシアとの問題は、その後、どうなったか？

ロシア艦長の捕縛と高田屋嘉兵衛

文化8年6月、南千島の沿岸を測量していたロシアの軍艦ジャナ号の艦長ゴロブニン以下7名の
者を、国後島でわが守備隊が捕らえて函館の牢屋に送ると、翌9年8月には、これに対する報復の意味も
あって、ジャナ号の副艦長リコルドが、わが幕府の御用船頭である高田屋嘉兵衛を国後島の沖で捕らえて、
カムチャッカに連れて行った。

ところが、嘉兵衛は囚われの身となっている間に、ロシア語を稽古して、一通りの談話ができるよう
になると、リコルドと懇ろに彼我の事情を話し合った上、間に立って日露間の紛議を調停し、ゴロブ
ニン以下7名の者をも函館でリコルドに引き渡して帰国させ、ロシアとの問題は、一時はともかく嘉兵衛
の努力で円満に解決を告げた。実に文化10年9月のことです。

これより嘉兵衛の名は全国に鳴り響いて、その家業はますます盛んになったが、文政10月4日に59
才で郷里の淡路で亡くなった。後、明治44年9月、その功を認められて、かの択捉島開拓の基礎を置い
た近藤重蔵と同時に正五位を贈られた。

イギリス船の暴行

ところが、一方、イギリス船は、その後も度々我が太平洋岸に出没した。商船もあつたり捕鯨船
もあつたりしたが、伊豆、安房、常陸の海上にしばしば漂泊したり、相模の浦賀に入港して、通商を求
めて拒絶されたり、常陸の大津濱に上陸して、薪水食料を求めたりしたのです。けれども、別段の敵意

第 19 話 外国船の来航と海防

を見せることがなかったので、いつもそのまま放還したが、文政 7 年 8 月、薩摩の宝島に來た捕鯨船に不良の徒がいた。はじめ牛をほしいと求めたのを島民が拒むと、無法にも銃を携えて上陸して、みだりに牛を射殺してその肉を奪って帰ろうとしたのです。そこで、島民との間に乱闘が起こって、双方共に死傷者を出した。

外国船撃攘の令

勿論、これは、不良の徒の一時の暴行ではあったのですが、この事件が江戸に伝わると、攘夷の論は一段と盛んになり、幕府も大いにその不法を怒って、ついに第 120 代 仁孝天皇の文政 8 年（西暦 1825 年）の 2 月 18 日に、外国船撃攘の令を出した。「いかなる外国船でも、若しわが海岸に近づくなれば、その事情の如何を問わず、直ちにこれを撃攘え」というのがその厳命の趣意でした。

西洋軍学の研究

こうして幕府は、この後もなお鎖国の方針を変えず、専ら心を海防にそそいで、高島四郎太夫（秋帆）、江川太郎左衛門（坦庵）らに新式の兵器、砲術を研究させた。

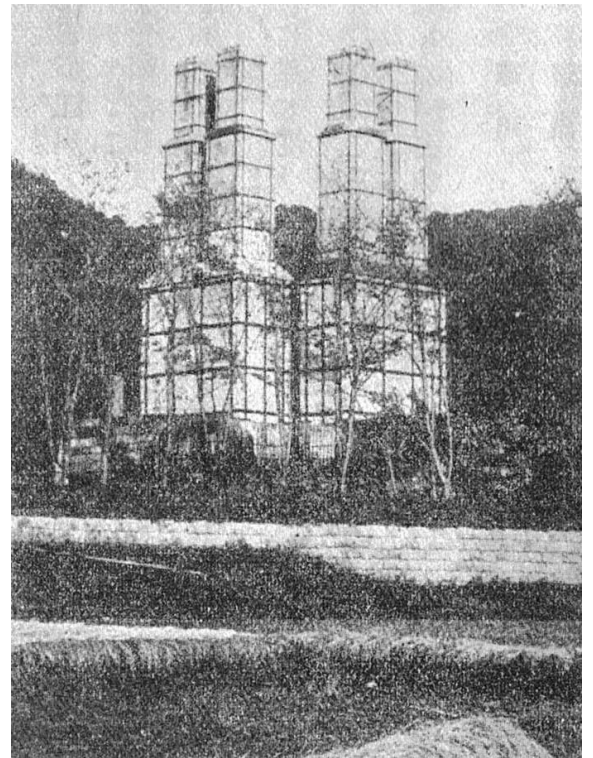
四郎太夫は長崎の人で、はやくからオランダ人に就いて学んで、西洋の兵学に通じていたが、天保 12 年に幕府に召されて、武蔵の徳丸原で西洋式の練兵を行い、得意の砲術を試みて大いにその技を賞され、これより砲術を旗本に教えた。

その門弟の中で最もその術に達したのが江川太郎左衛門です。伊豆の葦山の人で、代々その地の代官でした。彼もまた西洋兵式の教官となって、多くの門人を教えたが、後には幕府の海防の議に参与したり、品川砲台の築造を監督したり、反射炉（訳注：鉄の塊を高温で溶かし、大砲などを鑄込む）を葦山に造って大砲を鑄たりしたので其の名が高い。

このころ、諸国の大名にもまた攘夷論を唱えるものが多かったが、中でも最も強くこの論を主張したのは水戸の藩主徳川斉昭で

す。斉昭は頗る英明な人で、藤田東湖らの英傑の士を用いて

弘道館という学校を建て、大いに文武の道を励ますと共に、水戸の東方約 2 里ばかりの湊付近に反射炉を築き、さかんに大砲を鑄て海防に備えたりした。後に、嘉永 6 年にアメリカの軍艦が浦賀に來て、国論が沸騰したころ、大砲 74 門を幕府に献じて世人の耳目を驚かした。



伊豆 葦山の反射炉



水戸藩主 徳川斉昭

第19話 外国船の来航と海防

そのうじょうい ろん 尊王攘夷の論

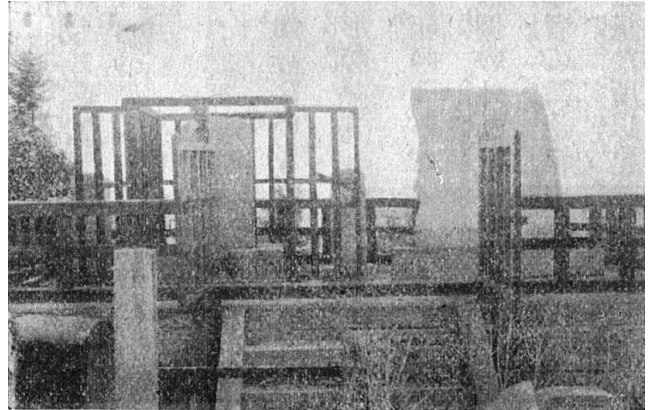
なりあき みつくに こころざし とうかく きにち
齊昭はまた光圀の志をついで、深く皇室を尊び、毎年正月元旦はもとより、先帝(光格天皇)の忌日には、必ず身を清めて京都を遥拝して、常に家臣を戒めて朝廷を敬い奉らせた。

それで諸国の勤皇の志士は、これを慕って多く水戸に集まり、水戸は全く勤王論の中心地となった。

このところに、今や攘夷論がさかんに起こると、齊昭は進んでこれを唱え、第1に先づ尊王によって国論を統一して、次には大砲の鑄造、大艦の建造等によって国防を充実して、以って天下の人心を引き立て、国威を損じないようにすることに努めた。

それでこれより、尊王攘夷の論が大いに天下を動かすようになりました。 なお、齊昭の外に、薩摩の藩主島津斉彬、佐賀の藩主鍋島直正らもまた、はやくから西洋の学術を応用して、兵器を改め軍艦を造り、大いに海防につとめたので聞こえています。

(第19話 外国船の来航と海防 終わり。 次は前頁に戻り、第20話 開港の始末 に)



水戸 松本町 藤田東湖の墓